

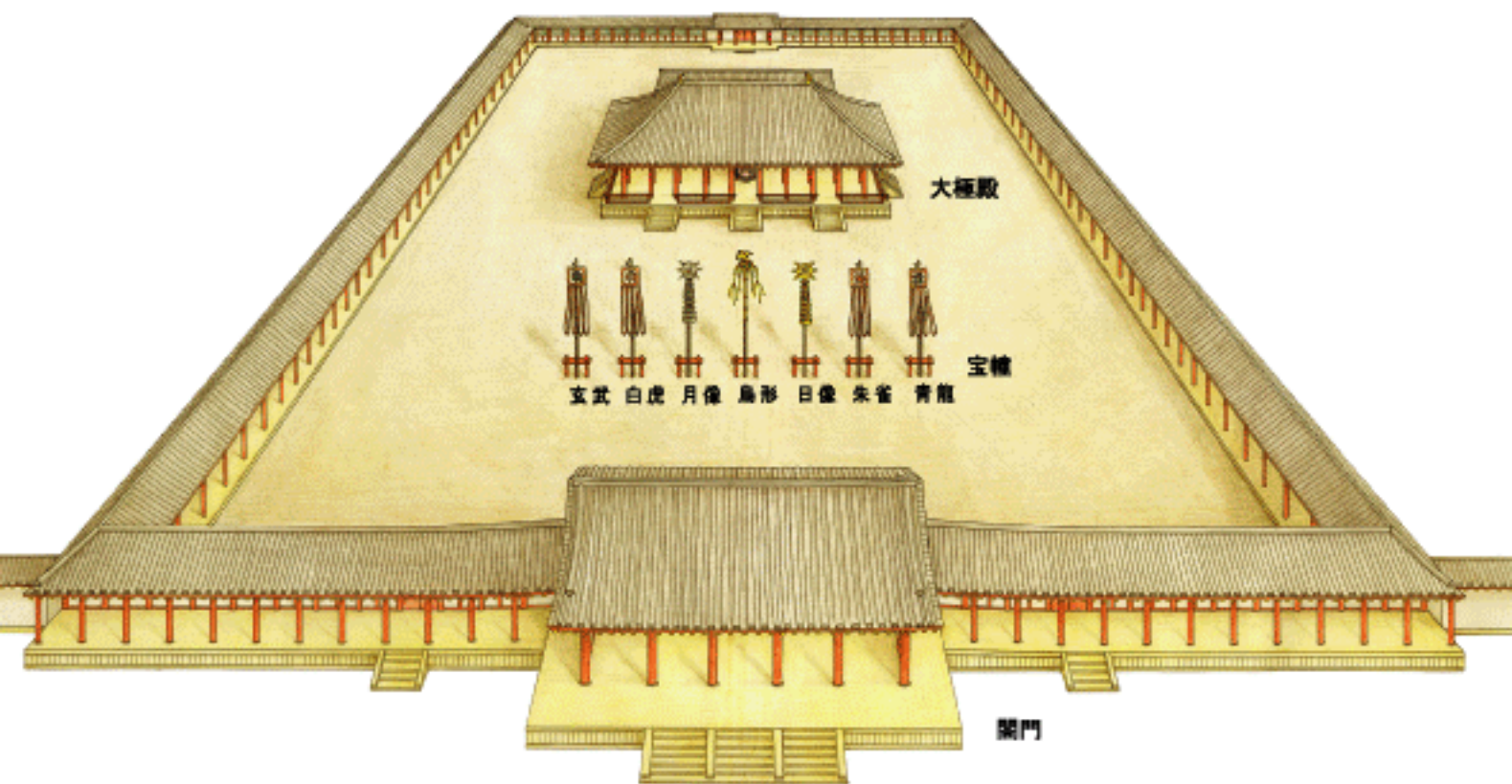


▲細長い穴が宝幢遺構(東から:奥「玄武」坑、手前「白虎」坑) ▲「玄武」坑を発見した様子(東から)

大極殿前庭にならぶ3つの大穴 阪急西向日駅の西口を出て、北に5分。桓武天皇が造営した都、長岡京の中心地、大極殿跡があります。この南庭西寄り^{西寄り}を2003年冬から2004年初めにかけて発掘しました。現在の地表面から、20cmほど掘り下げると、黄色の硬く締まった地面が現れ、拳ほどの石と柔らかい土で埋められた長方形の穴が2つ出土しました。穴の内部を掘り下げると、深さが1mもありました。形は、四隅が丸い長方形です。まるで電柱を立てる穴をみるようです。

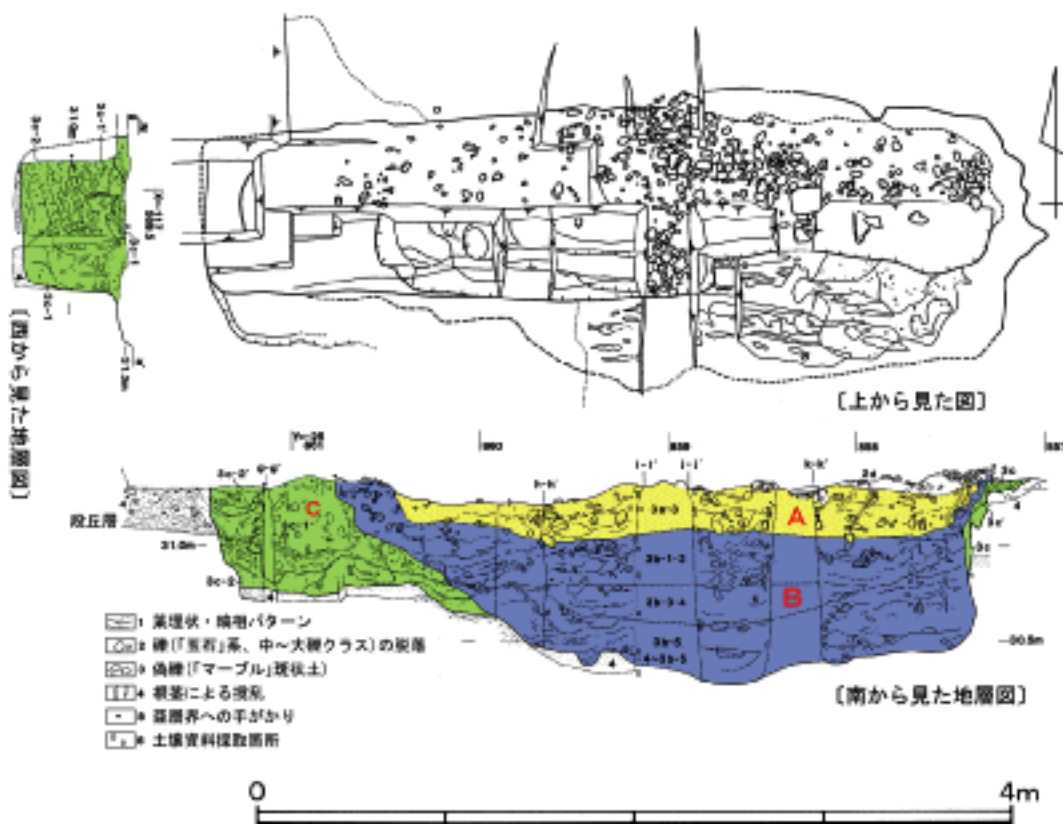
この穴の正体は？ 実は、1997年、同じ南庭の東部を発掘してよく似た3つの細長い穴をみつけていました。東西一直線に6m間隔で整然と並びます。穴の底には円形の柱状の跡が3つありました。奈良・平城京の発掘例や江戸時代の儀式図『^{ふみあんちようどそくいす}文安賀度即位図』から、天皇が即位や朝賀の儀式の際立てた、旗竿(宝幢)跡とわかりました。大穴の正体は、高さ7mの心柱、これを支える脇柱を埋めこんだ跡だったのです。これで、長岡宮大極殿の前庭に、5箇所^{5箇所}の宝幢遺構があると確定しました。桓武天皇は、平城京で即位していますから、この宝幢は朝賀式に立てられたとわかりました。

平安時代の書物、『^{えんぎしき ひょうごりょう}延喜式』兵庫寮には、宝幢の立て並べ方が詳しく書いてあります。出土した宝幢遺構と対照すると、元々7箇所あり、発見したのは、東側の日像、朱雀、青龍と西側の玄武、^{びやくこ}白虎に相当するとわかりました。残りの鳥形幢、月像幢もあつた可能性が高まりました。青龍・白虎・朱雀・玄武は古代中国の五行思想による靈獣で、それぞれ東西南北を守る神です。桓武天皇は、中国の思想を積極的に取り込んで、儀式の荘厳さを高め、元日朝賀を一大演出したのでした。



▲大極殿前庭の宝幢配置イラスト（南から）

宝幢は大極殿南基壇より29.9m（101尺）の位置で、正確に立てられました。天子（天皇）が大極殿で南向きに着座したとき、宝幢の図柄は天子に向いていたという考えもあります。また、ほかにも各種の旗竿や舞台が設けられていた可能性があります。宝幢遺構に残っていた礎は、大極殿全面に石が敷かれていたことを示しています。



▲「玄武」坑近景（西から）
保存のために南半部のみ調査しました

▲「玄武」坑を解剖する

玄武坑を東西に輪切りにして、地層境や堆積構造を図にしました。穴の内部は、3種類の土（A～C）で埋まっていた。Aは表面を覆う土、Bは最終抜き取り時の整地土、Cは最初の構築が抜き取り後の整地土です。C→B→Aの順に堆積しています。Bの土は複数回の抜き取りの結果、土の構造を失い、いわば「こなれた」状態でした。この土層状態から毎年、正月前に穴を掘っては立て、朝賀式終了後撤去するという作業工程を繰り返した可能性が強まりました。